

氏名	おおさわ ゆか 大澤 由佳
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲博制第 45 号
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）
学位論文題目	写真における怪物的なもの と異界について— 須田一政の写真を手掛かりとして—
作品テーマ	写真における怪物的なもの
論文題目	写真における怪物的なもの と異界について— 須田一政の写真を手掛かりとして—
論文審査委員	主査 教授 織作 峰子 副査 客員教授 高岡 一彌 副査 教授 豊原 正智 副査 教授 瀧本 雅志

内容の要旨

本論文は、写真に内在するであろう「怪物的なもの」を、申請者・大澤由佳（以下申請者と略す）は自らの目で確かめるために「写真における怪物的なもの」がどのように存在するのかを考察するものである。

その上で、『marginal（端・境界・限界点）』と名付けられた作品は『怪物的なもの』が現われ出でるかのような申請者自身により写し出された作品を通し、その存在を表徴するものである。

すべての写真に怪物的なものが宿るのかどうかは定かではないが、怪物的なるものを探す手がかりとして、フロイトや、ラカンの論文を援用しながら、不明瞭とも言える

「怪物的写真」の核心に向かう取り組みである。

第1章 怪物的な写真とはの章では、怪物の意味を紐解く為に、フロイトの論文『不気味なもの (Das Unheimliche)』とラカンの『現実的なもの (le reel)』から、不気味なものとは、正体の説明が困難であり言い切ることのできないもの。また怪物については、主体から受け入れられず排除されたものである。との理論から、申請者は写真に写る怪物的なものは、日常が見慣れない日常に変化するきっかけとして写真に存在し不気味なものを想像させる存在と仮定した。

第2章 須田一政の写真と異界の章では、日常をストレイトに撮影していながら、日常とは異なる異界の世界が写っていると評される写真家・須田一政の経歴と、須田の作品に写る異界を分析し存在を紐解く。

2-1「須田一政について」では、生い立ちから千葉県に移り住む迄の40年間の経歴を記す。

2-2「細部の異様さ」では、境界の場所を異界への回路と定義付け、異界と両義的な世界をつなぐ橋の役目が「境界」と考えここであらためて須田の写真から、写真に内在する異界の分析を試みる。

(a)「重なりと一体化」では重なりにより隠された部分により見ていなかった現実が出現する不気味さを異界に例えて論じている。(b)「生滅」では、松岡正剛の著書『日本流』にある「何かは何かに見える」という言葉から、須田の写真を通して見え隠れする何かを探る論法を試みる。(c)世界の二重性巨大と極小では、ロラン・バルトの写真論と須田の作品に見える巨大と極小の差異による非日常的な場面の不可思議性を示し、(d)の反復では、申請者がとらえる被写体について、気になる対象は年月の経過には関係なく反応し、繰り返し求める行為が継続したり、内奥にあるものを反復で求める性質から、須田の「繰り返し」の作業に自身の行為との類似点を見つけている。

第3章 博士作品《marginal》の章では、展示作品を総合し、marginalという題目をつけた。その理由は前章から述べられてきた「怪物的な写真」を論ずるにあたり、撮影されるものと撮影されたものとの境界に申請者である撮影者がいる様や、写ってい

るあるがままの状態から別の何かを想像させ得る写真を表現することを目的とし作品が制作された。この章には、申請者が幼い頃から憧れていた、物語や絵画の世界に出てくる竜や人魚などの怪物を、自身の目でリアルに見てみたいという願望がいつしか不可能と認識した時に、怪物の正体とは現実に存在するものと、ものとの組み合わせであり、現実に見えているものから想像された生き物であることと理解した。カメラを購入し先ずはフランスに留学、その後イタリア、イギリス、スペイン、アメリカなどで撮影した作品には、もう一つの現実が隠されている、についての説明が、[写真1～9]によって説明。

最後に申請者の過去の作品《Fairy Tail》については、雑誌に載っている妖精をハサミで切り抜き自然背景の中に設置し撮影を行う手法で、これらの世界観は申請者にとって怪物的な写真を撮るきっかけとなったものの、演出写真とも言われるステージド・フォトグラフィーの表現手法は、現実に妖精を見た証拠写真ではないという事実に対し違和感を感じ始め、加工をしない手法にて、そのままの日常から見えない場を想像するという可能性を写真に見出そうと試みた。

審査結果の報告

論文について

申請者は写真における怪物的なものとの異界についての研究を試みフロイトの不気味なるもの「Das Unheimliche」から論証を始め深層を表層させ、「写真における怪物的なるもの」の存在を考察するものである。

副査・瀧本雅志

どんな写真にも内在するはずだが、しかし巷の凡庸な写真の多くにおいてはなかなか姿を顕現させない「怪物的な」次元に迫ろうという問題設定で論考がなされており、大変に意欲的な試みと言える。写真の認識論の「彼岸」へと目を向け、写真の存在論に関する真摯な問いが発せられていることについて、副査の一人として大いに評価した

い。

その「怪物的なもの」を探る手がかりとして、「論者」は、フロイトの「無気味なもの」や第一局所論、ラカンの「現実的なもの」等を援用し、自らに「固有の問題」である「怪物的なもの」の周囲を巡ってゆく。また、須田一政の写真をフォルマリストティックに分析し、そうした「物」がどのように具体的なある種の写真作品において顕現するかも検討しており、とりわけそこには、この論者ならではの問題意識や感性がきらきらと結晶化している。

とはいえ、それらの概念や理論どうしは、半ば不分明なまま境目なく繋げられ論じられてもいるし、また「論者」が「怪物的なもの」とあえて名指した要素や境位がそれらと果たしてどこから異なるのかが、明確に示されてはいなく、また、須田写真の「異界」と、自身の論じる「怪物的なもの」との差異も、十分に「意識化」されていない「無気味な」感を残すが、迂回的で不明瞭な論述の仕方は、ある程度まではやむをえないものとも弁明しうる（「謎」を「謎」として語る論法?）。「論者」も記すように、「排除」された「現実的なもの」が「回帰」するものであるのなら、論述において、（そうした「もの」の次元横断的な動性によって）異界と境界と日常的な世界が不分明に交錯し重なり合うことも、その事情に「即した事態」の実演と言えないこともなく、論文の意欲的な問題設定ゆえに生じた「取り扱いの困難」がおそらくは「無意識」に出現したもので、きわめて「現実的なもの」であるとも捉えてみたい。

副査・豊原正智

申請者は「怪物的なもの」あるいはフロイトの「不気味なもの」を援用し、須田一政の写真に見られる我々を「異界」へ導く作用について具体的に分析し、自らの写真作品をその延長上に捉えているところは明解である。その作用が何によるのかについては、須田の好む「空間」「造形」「色」「材質」が日常界から異界への境界の役割を果たしているという論述は説得力がある。つまり、何の変哲もない須田の写真の日常的な風景が先の境界を超えて異界へ、すなわち不気味なものへ向かうのは、フロイトのいう抑圧

によって「秘密に隠された (heimlich)」「馴染みのあるもの (heimlich)」が再び現れ出ることによる「不気味さ (unheimliche)」と相通じる。すなわちこの「不気味なもの」は「馴染みのあるもの」と「秘密に隠されたもの」という両義性の上に成立するのである。それはまさに須田の「日常界」と「異界」の両義的写真の「不気味さ」であり、「怪物性」である。以上のような論文の核となる論述は正鵠を射ている。

問題点

・「須田一政について」は、彼の経歴、創作活動などの事実に記述を本文の中であまりに多く説明しすぎている (5 頁分)。もう少し整理して事実関係の説明は註に回すべきである。

・「怪物的」という用語の必然性が必ずしも明確ではない。そこにはもちろん「不気味さ」があるが、ただ単に言葉の辞書的な意味上の関係に思える。それに比べれば、「不気味さ」はフロイトからの援用が明解である。

副査・高岡一彌

作者は作品全体を、境界・限界点を意味する「marginal」と名付けて、写真における「怪物的なもの」、そして作者の追求する「怪物的な写真」の研究と考察がなされている。不気味なもの、異界的なもの、日常の深く沈んだ景 (けしき) からされた徴象された、差異化の世界「Unheimliche」を「怪物」と言い切ったのは実に面白い。作者の視線の新しい発見と言っても良い。日常と非日常の境界に存在している隠されたものが顔を覗かせる時、そこに「Unheimliche」なるもの、つまり作者の仮定する写真における「怪物」が顕現する。その「怪物なるもの」の世界を可視化させる事が自らに課した研究課題で、作品をつくる作業の中でその意味を問い続けている。作者の長きにわたるその姿勢は実に真摯である。作品と論文を照応すると、作者にとって重要なのは、目に見えないものを見ようとする心であり、又目に見えないもののひとつである心、この深層に宿る不可思議なるものを表象させる行為が作者にとって写真を撮る意義であることを読み取ることができる。

作品について

作品制作について、写っているものは現実であるが、同時に非現実の世界を表象させた作品群である。表現の方法としては今見直されているストリートフォトの新しい一種の有り方でもあるが、そこから表象された作者の求める怪物的なるものは、鑑賞者によっては不安定さを感じさせ、不可思議な気持ちにさせるが、その不安定さこそが作者の言いたいことで、それが題名の示唆する「marginal」なのであろう。そして、正常とは異なる異界でもあり、怪物の表徴（しるし）なのである。また展示において、本来最も嫌われる反射や鏡面を使い、作品を鑑賞する側の姿も写り込ませた上で、作者と観る者との感情を重ね合わせた新しい試みの展示であった（主査）。

副査・高岡

見えないものを表徴へ導くファンダジアの作業は2006年から2017年の今日まで続けられている。作者が試行錯誤を繰り返し、市街を歩き廻った作品群は、結果として膨大な量を生み出した。そこに、今後の可能性も含めて大いなる拍手を送りたい。展示については、1点1点拡散された作品が響き合って、作者の意図する「marginal」全体を形づくっている。現状の空間をうまく使ってコレスポンデンス的（交感し合う）展示効果を見事に演出している。鏡に貼られた写真は対面の展示された写真そして人に見る者の姿が余白の鏡に重層してうつり、透明アクリルに貼られた大小の写真のアトラダムな集合体から他の作品群が透けて見える空白の装置にも、真に作者の「marginal」（縁・端・辺境・境界・枠外の余白に書いた）題名のトリックにまんまとすべり込まされた。又、見世物小屋的展示のドラマツルギーにも感嘆した。総評として、一方で強引に自らの側に読むもの見るものを無理矢理引きずり込んで、作者の意図するものを論証しめようとする無理矢理のところも否めないが、それは作者の想いの重さと捉えたい。

副査・瀧本

作品は、中間発表時よりさらに魅力的な展開＝転回を示し、「怪物的なもの」の領域を「拡張」しているようだ。「怪物的な物」を中心に巡っていたかのようなこの「写

写真における怪物的なものと異界について—須田一政の写真を手掛かりとして—

真家」の焦点は、いまやむしろ「marginal (辺縁的)」な領域の「現実的な」広がりへと、(展示タイトルが示すように、確かに) 柔らかに移行している。「怪物的な物」が出現するなかで、それを囲む「日常的な世界」の風景もまたゆるやかに「異化」されて、「現実的なもの」と化して浮遊してゆくこと。そして、そうした「異化」による「浮遊」は、個々の写真から、写真の周囲の展示道具や展示空間にまで及んでいて、展示空間自体が「marginal」な「超現実性 (シュルレアリテ)」を浮上させている。

写真作品を収めた銀のフレーム、展示空間中央の透明パネル、左側の鏡の列、そして展示空間奥のガラスとその向こうの「風景」(ちなみに、その「向こう」には鴉のオブジェがこの「作家」によって置かれている) までもが、この「現実的なもの」の「浮遊」を見事に実現し、多様な流れや拡散や映り込みや多様な反射が、ふんわりとあたりを満たす。しかし、「作家」は、その展示の方法論や技術には、さほど「意識的」な「自覚」をしていない模様である。だが、ここでは、論文の「論者」の主題(=「怪物的な」「物」)の延長上に、それを包み、開くようにして、「作家」の「現実的なもの」(=「marginal」な「もの」)が広がっているのであり、それはまさに、この学生における「論者」と「作家」とのポジティブな繋がりを現前させている。

以上、結論として、審査員全員が、論文・作品共に博士(芸術)の学位申請論文に十分値するものと認定し、合格とする。